

## 守山小学校を核とした地域コミュニティのその後の展開

### －「まもりやまテラス」と「まもりやまはたけ部」－

一般財団法人世田谷トラストまちづくり 地域共生まちづくり課

風間 委文字

(地域 コミュニティ 住民参加)

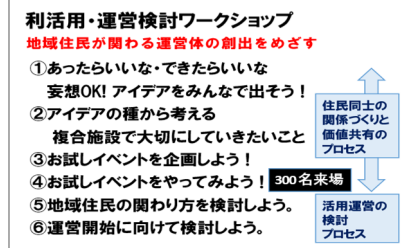
#### 1. はじめに

世田谷区立守山小学校は1933年、代田6丁目に開校した歴史ある小学校である。近年は小規模学校の特色を活かし、地域運営学校として地域とともに子どもを育てる教育を推進してきた。2012年に近隣2校との統合が決定。2019年、小学校の既存建物を活用し、保育園、福祉作業所、地区会館からなる複合施設へと生まれ変わった。小学校を軸に育まれてきた地域の関係性がその後どのように引き継がれ今に至るかについて、現在も個人として関わる活動も含めて述べていく。

#### 2. 経緯

守山小学校は、地域とのさまざまな連携により活用が行われてきた。地域行事（地域運動会、餅つき大会）のほか、「あったらいいな、こんな学校の会」（1999年～保護者や地域住民からなる市民グループ）は、小学校に地域住民が関わることでよりよい地域とよりよい学びの場にしていくことをめざし、環境学習を中心に活動を進めてきた。当財団の助成事業「公益信託世田谷まちづくりファンド」を活用して、自然観察会、ビオトープづくり、屋上緑化活動のほか、校庭の一角にウッドデッキを整備し、さらなる地域交流拠点づくりを進めた。

複合施設化にあたっては、これまでの地域との関係性や学校への想いを継承しながら、地域住民が運営に関わることでできる拠点としていくため、世田谷区は、住民参加型運営体の創出をめざすワークショップ（2017～18年）を開催した。当財団はこのワークショップの企画運営に関わった。



2年間のワークショップ（全6回）のプロセス

#### 3. まもりやまテラスの会の取り組みと部活動「まもりやまはたけ部」

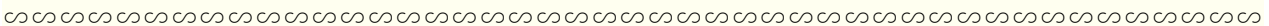
複合施設は、2019年、住民投票によって「まもりやまテラス」（以下テラス）と名付けられオープンした。地域住民が関わる運営体は、ワークショップ、準備会議を経て2020年に「まもりやまテラスの会」（以下テラスの会）として正式に発足した。メンバーは代田北町会、羽根木町会、保育園、福祉作業所、社会福祉協議会のほか、新たな拠点づくりに関心のある住民が参加し、現在も運営を行っている。施設利用ルールの検討、地域住民がテラスに関わるしくみづくりとその推進、ホームページや紙媒体などの情報発信、交流イベントの企画実施を中心に、試行を重ねながら走っている。従来の公共施設運営にとらわれない柔軟な発想でさまざまな試みに挑戦しており、これは世田谷区の担当所管の理解と協力があったことである。

テラスの会の特徴的なしくみのひとつが「部活動」である。地域住民がテラスで自ら行ってみたい活動を応援するしくみで、実現に向けてテラスの会がサポートする。いつでも誰でも参加できる「オープンな活動」と「テラス運営への協力」が条件となるが、テラスの会公認で施設内での活動が可能となる。これまで6の部活動が創出されている。

「まもりやまはたけ部」は、2019年春、施設オープン直後から活動を開始した。小学校時代からある畑を使って、地域の人たちと楽しく野菜づくりができたらと、当初に決めたコンセプトは3つ。ゆるやかに活動すること、指導員を立てずにみんなで試行錯誤しながら進めること、環境にできるだけ優しい方法をとること。現在、約40名のメンバーは、1歳から70代まで幅広く、多忙な子育て世代、働き世代が中心であるため、週末・月2回程度の活動を軸に、来れる人が来て作業をしている。また作業の際に「実り」があれば各自持ち帰りOKとし、曜日で水やり当番を決めて日常作業を分担している。失敗も繰り返しながら、毎回育てたい野菜のアイデアを出し合っている。活動日以外の情報共有は専らラインを使い、顔を合わせる機会が少なくとも互いに声を掛け合い、採れた野菜を使ったレシピなども共有している。子どもたちの成長はめざましく、3年活動すると鍬をもって一緒に作業できるようになる。活動を通じて畑以外の場所で挨拶を交わしたり、別の園や学校に子どもを通わせる保護者同士が畑で作業しながら情報交換したり、畑を通じての関係も見えてくるようになった。

#### 4. 今後について

守山小学校は複合施設化により、より多くの人に関わる拠点になりつつある。テラスの現在の展開は、地域と小学校とが長年関係を積み重ね、また開かれた小学校として地域に根付いてきたことがその土台にある。これまでのひとつひとつの積み重ねの上に新たな関係性が創られているのが特徴である。今後のテラスの発展には、地域の居場所として多様な人々が、この拠点とその運営に今後も関心を寄せ、主体的に関わっていくことが重要と考えられる。



#### <助言者コメント>

園田 巖（東京都市大学人間科学部児童学科准教授）

「まもりやまテラス」の活動を拝見して先ず脳裏に浮かんだキーワードは、「自然に」というものです。新たな事業展開を考える際には、ややもすると目的を達成しようとするが余り、強い主導のもと無理をしがちになってしまいます。強引な手法による無理な取り組みを行った場合に、活動そのものが停滞化・形骸化してしまったという話を他の地域で聞くことがあります。ところが、まもりやまテラスでは、あくまでも自然な流れを重視しながら、「結果的にそうなる」ことを目指しています。この手法は、区民一人一人がもつ多様な価値観を認めることになるとともに、そこから生み出される主体性や多様性をも尊重する風土につながっていると考えられます。そして、忘れてはならないことは、この風土が小学校と地域社会とが長年にわたり信頼関係に基づいた相互補完関係を築いてきたことから生み出されたものということです。

新たな時代の「まもりやまテラス」が実践している、「多様で」・「主体的で」・「自由で」それでいて「秩序だった」という活動スタイルは、地域社会のあり方を改めて問い直しているものであり、現在多くの区民が訪れ、そして活用している大きな理由のひとつではないでしょうか。

「まもりやまはたけ部」についても同様であり、そのコンセプトにある「ゆるやかに」という言葉が活動の多様性を象徴しています。様々な年齢や職業の人たちが集まり、主体的活動をとおして試行錯誤していくという手続きは、地域性や異世代、家族構成の違いを感じさせない多様性を尊重した活動を創出している推進力になっているという印象です。

これからも、多様性と主体性を尊重し、地域住民に根差した活動を期待しています。